

『人の思い、神の思い』（使徒の働き 5章 12-32節）2023.7.23.

<はじめに> 私たちは、白黒板挟みの中で、難しい舵取りを迫られることがあります。そのとき、しっかり自分の立場と意見を伝えることはたやすいことではありません。教会と使徒たちには、擁護者のいない中、厳しい状況にあって、何を大切にひとつひとつ選び取って行ったのでしょうか。

I 人の反応(12-18)

①使徒たちと信者(12)

使徒たちは、イエス復活の証拠としての奇跡を、人々の間で数々行っていました。4:30の祈りの結果です。ソロモンの回廊は、信者たちが集まる場所となっていました。そこでかつて何が起こりましたか(3:11)。彼らは、何に心を一つにしていたのでしょうか。

②周囲の人たち(13-16)

遠巻きに尊敬のまなざしを向ける人もあれば、主を信じ、仲間に加わる者も増えて行きました。やがて病人や汚れた霊に苦しむ人々を連れて近傍の町々から大勢集まるようになります。自分の立場や考え、抱える必要や期待によって、距離感と対応が変わります。

③サドカイ派の者たち(17-18)

サドカイ派は大祭司を中心とする裕福な指導者層の多くを占めていました。奇跡、御使い、復活と来世を彼らは信じていません。彼らは、使徒たちに語ることを禁じたのに、なおも語り、人々の尊敬と関心を集めているのを妬んで、使徒たちを捕え、留置場に送りました。

II 神の思いと人の企み(19-28)

①主の使い(19-20)

その夜、主の使いが牢の戸を開けて、彼らを連れ出し、「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばをすべて語りなさい」と告げます。使徒たちはこれを聞いて、どうしましたか(21)。神の思いと、世間の考えや自分の思いが食い違う時、私たちはどうするでしょう。

②大祭司たちの思い(21-27)

大祭司一派は、捕らえた使徒たちを、翌日最高法院で裁く段取りでした。ところが、牢に使徒たちの姿は無く、彼らが宮で教えていることが分かり、直ちに再び捕らえて、最高法院に連れ出します。彼らは、使徒たちのことでなぜ当惑していたのでしょうか(24)。

③訴えのことば(28)

大祭司が使徒たちに言い聞かせたかったことは何でしょう。「われわれが命じたことを破り、われわれにイエスの血の責任を負わせようとしている」。自分が中心であり、自分は悪くない、間違っているのはお前たちだ、と言わんばかりです。神はどこにいらっしゃるのでしょうか。

III 使徒たちのことば(29-32)

①神に従うべき(29)

使徒たちは 4:19 を決断として改めて表明します。大祭司は自らの立場と権威で迫りますが、神不在の人のことばです。彼らは、人よりも遥かに優る神に従う道を歩んでいました。神の名を語る大祭司に、これを否定することばはありません。

②神は赦す御方(30-31)

大祭司は、イエスの血の責任をわれわれに負わせようとしている、と逃げ腰です。しかし使徒たちは、イエスを十字架につけて殺した罪を赦すために、神はイエスを死からよみがえらせて天に上げられた、と告げます。だから悔い改めて、神に立ち返るよう促しています。

③二人の証人(32)

使徒たちは、イエスの復活の証人であるとともに、イエスによって罪を赦された証人です。神は、このイエスの福音に従う者に聖霊を与えて、ご自身も証言されています。「二人または三人の証人の証言によって、すべてのことが立証される」(マタイ 18:16)とおりで。

<おわりに> 人は常に自分は正しく、自分の意のままに物事を理解・解釈し、そのとおりになることを望む者です。神の目から見れば、人は過ち易く、偏り見る罪深い者です。しかし、神はイエスを救い主、信仰の導き手として私たちに与えられました。誰に従い歩みますか。(H.M.)